

# 東海林太郎音楽館 かわら版

NO. 6



季刊 東海林太郎かわら版 第6号

令和2年9月6日

発行 東海林太郎音楽館

館長 佐々木三知夫

〒010-0921

秋田市大町2-1-11

TEL/FAX 018-823-5145

E-mail [taro@donpu.net](mailto:taro@donpu.net)

<http://www.donpu.net/>(ふるさと呑風便)

## 小指の指輪

「ニュータイガー」というキャバレーがあった。

現、秋田市大町2丁目の東海林太郎音楽館。榮太樓菓子舗大町本店の2階が喫茶店だった頃、そのすぐ向かいにあった。当時、キャバレーは秋田市の繁華街・川反(かわばた)に一軒、有楽町にももう一軒のキャバレーがあつて3軒がしのぎを削っていた時代。

HP東海林太郎音楽館に太郎さんから次のように語ってもらいました。

「平成17年8月1日、竿燈の稽古のさざめきが聞こえる頃。秋田市の真ん中大町2丁目にある榮太樓菓子舗大町本店二階に開館されました。窓の下は旭川の清い流れ。ウグイが泳いでいます。」

秋田の東海林太郎顕彰会の皆様や東京の東海林太郎歌謡芸術保存会(中村邦雄会長)や大阪の高瀬博さん、全国の多くの方々の善意を得てオープンすることができました。

東京の古賀政男記念館や日立市の吉田正記念館、また、秋田県森吉町の浜辺の歌音楽館と比べたら、40坪足らずで、NPO法人東海林太郎伝承会設立の小さな記念館ですが、私としては郷里の皆さんが熱い想いで、市民の力で立ち上げてくれたこのことの方が嬉しいと思っております。ここは昔、榮太樓菓子店の喫茶店だった所で、すぐ前にニュータイガーというキャバレーがありました。

私はそのこのけら落としに呼ばれ、歌ったことがあります。私は榮太樓の「さなずら」という山葡萄をゼリー状にした

菓子が好きで、キャバレーの休憩の間、さなずらを食べながらここでよくお茶を飲んだものです。」

私が音楽館に来館される方々に説明するに、太郎さんの厳格な父親大象氏(当時秋田県庁土木課建築技師)が自ら設計されたとされる生家の玄関先を移築したこと。早大時代の親友で4年間同居下宿の同部屋で過ごした瀬尾俊二(後の雪印乳業中興の祖)が天国から音楽館に遊びにこられた時の為に、札幌の雪印乳業歴史館から寄贈された牛乳箱を置いたこと。そして、太郎さんの小指の中指にはめている指輪のことである。



ある時、東京からいらした妙齢の女性に、太郎さんの肖像画の小指の指輪について説明したことがあった。

「この指輪は、太郎さんを支えた静夫人が亡くなられた時、そっと左指の結婚指輪をぬいて、自分の小指にはめたものです」。それを聞いたその女性曰く。

「うちの主人、私が死んだら指輪を自分の小指にはめてくれるかしら、たぶんしないわね」

(さだまさしの関白宣言3番を聴いて下さい)

古希の歌手シンジューさんこと、福岡市の麻生進さんは東海林太郎を「心の師」

と仰ぐ。麻生さんは大学時代に太郎さんから受けた優しさに感動した思い出を秋田県へ応募。その文の一節です。

「お礼状を出した。随分経って。旅先から絵葉書が届いた。(中略)大学3年の頃だったろうか、「福岡のクラブに出演します。楽屋へ遊びに来てください」との絵葉書。飛んでいった。あの人懐っこい笑顔で迎えて下さり、コーヒーを立てて下さった。初めてのごとだった。私の話は弾んだ。東海林さんの計らいで高級クラブの最前列の席で歌を聴かせてくださった。なんて優しい方なんだろう。」

(中略)東海林さんは考える事の大切さ。寛容さ、公平さ、謙虚さで、人として器量の大きさを示して下さった。その人間性がどこに根付いているかは知らずとも、私に心の宝を下さったことは間違いない。歌を一節も習ったことはないが、私にとって『心の師』と呼ばせてもらっている」。そして彼は東海林太郎の名曲「母に捧げる歌」をCD化された。

東海林太郎直立不動像の木像が完成した。東海林太郎の高校後輩で彫刻家の鎌田俊夫先生が語る。

「東海林太郎への深い愛着と敬慕の念が強まり、ある瞬間ではなく彼の全人生を彫っています。静夫人が亡くなる前までつけていた指輪が、太郎さんの左手小指にあります。それも彫っております」。

東海林太郎の命日が十月四日。

その日、菩提寺である秋田市土崎の西船寺にて墓前祭を執り行います。

鎌田先生、シンジューさんにも出席ねがい共に「母に捧げる歌」を唱います。